

「ありがとう西高！」新聞

発行元：「ありがとう西高！」実行委員会広報室
Mail：nishikouarigatou@gmail.com
#ありがとう西高

Instagram：nishikouarigatou
twitter：@nishiko_arigato
ブログ：https://thanksomiyawest.blogspot.com/

最後の体育祭、盛大に

令和元年10月3日、大宮西高校として最後の体育祭が行われた。在校生は1学年のみ。例年より参加人数が少ないが、変わらぬ盛り上がりを見せていた。裏方では、1学年でも盛り上がるよう、体育委員を中心に種目が一部組み直されるなど多くの工夫が施された。また一つ、西高のイベントが最後の時を迎えている。



文化祭直前期の様子。大量の工具が並んでいた。

「3年生のみ」特別ルールで進行

在校生が3年生のみとなった今年は、参加人数が少ない中でも今まで通り、それ以上のクオリティで体育祭が行えるよう、競技ごとにルールを改正。騎馬戦や綱引きは種目から消え、代わりにパン食い競争と足し算リレーが加わった。

運営担当の体育委員を中心に、生徒と先生が一丸となって準備が進められた。段取りが整ったおかげもあり、当日はかなり余裕を持ったスケジュール進行ができていたという。近年の体育祭における、目玉イベントはなんと言っても応援合戦。今年も西高らしい各団の個性が溢れた演出により、大きな盛り上がりを見せていた。しかし、全学年揃っていた頃の体育祭との規模の違いを寂しがる生徒の声もまた多く聞かれた。例えば綱引きは全学年合同の対抗戦で行なわれていたが、今年綱引きの自体がプログラムから消えた。

生徒からは「1年生の時に先輩と協力して戦った綱引きが思い出深かったので、できなくて悲しい」といった声もあがっていた。

最後の体育祭で体育委員を務めた生徒は「種目やルールを一から考えるのは大変だったが、体育祭当日に皆が楽しんでいる姿を見て頑張ってたよかったです、心の底から思えた。最高の学校だと改めて感じる事ができた」と話してくれた。9月の文化祭に続き、大きな行事がまたひとつ、最後の時を迎えた。3年生はこれから受験シーズンだ。



大変盛り上がった足し算リレー

あの場所は、今 -多目的室編-

多くの西高生にとって、多目的室はなじみのない場所かもしれない。記憶にないという卒業生もいるだろう。しかし文化祭の運営に携わった者にとっては、夏休み前後の光景と共に思い出される名前である。記者にとっても強く記憶に残っている場所だ。

高校1年目の夏が近づくころ、初めて多目的室に入った。この頃に抱いた印象は「普通の教室」で、なぜ流し台があるのか気になる程度のものであった。やがて文化祭テーマが決まり、モニュメントやフラッグの制作が始まると様子が一変した。教室じゅうに敷かれたブルーシートの上に大量の工具や業務用の接着剤、ワイヤーや木材が並ぶ。しばらく作業していると服は木片まみれになり、ペンキのおいが染み付いていた。

風に乗って聞こえてくるセミの声を押しつけて、生徒ホールの向こうに見える重層体育館からリハーサルの音が響いてくる頃になると、歴戦の先輩方の顔にも焦りが見えてくる。いよいよ文化祭が近い。本番直前に完成し、夕陽に照らされたモニュメントを眺めながら、流し台にこびりついた塗料の汚れが、歴史を重ねてきた遺産であると気付いた。

先日、西高最後の文化祭取材した際に、思い出の場所に立ち寄ってみた。流し台は、記憶以上に、更に厚い歴史に染められていた。ここに色が重なることはもうないが、ここで生まれた思い出は色褪せないだろう。流し台から顔を上げると窓から真っ白な新校の校舎が見えた。あちらはこれからどんな色に染まって行くのだろうか。(石川)

閉校イベント用の動画撮影行われる

9月29日、西高校舎や校庭を使って、閉校イベントに向けた記念動画の撮影が行われた。制作には映画撮影でも使われるプロ用の機材が運び込まれ、有名なテレビCMや大ヒット映画を手掛けた制作会社に勤める卒業生が

中心になり、西高を象徴するような爽やかな青空の下での撮影となった。

校舎内では文化祭の様子を再現。先日使用された文化祭用のモニュメントも小道具として再利用された。監督の進行指示に沿いながら、各シーンの撮影が進んでいく。教室に大口径レンズのビデオカメラが運び込まれ、非日常的な空気の中で、かつての日常が演じられていた。学校の全面協力もあり、撮影は終始和やかに進んだ。映像は来年の閉校関連イベントで上映される予定だ。



内容は、当日見てのお楽しみ。

大宮西高

いつでも「仕掛ける」側の人間に。

岡安 章介さん（お笑い芸人）

お笑いトリオ「ななめ45°」のリーダー、岡安章介さん。「車掌のモノマネ」をテレビで見かけることも多い。大宮西高は1998年卒。2000年にトリオ結成し、来年で20周年を迎えることになっている。「エンタの神様」など、テレビ番組でも活躍している岡安さんだが、西高在学時はどんな面白いことをしていたのだろうか。ご本人に単独インタビューすることができた。

ダンスにラップに、大騒ぎした後夜祭

まず、西高時代の思い出でいちばん記憶に残っていることを聞くと「なんと言っても後夜祭です」と即答してくれた。近年は毎年盛り上がっている文化祭最終日の「後夜祭」だが、岡安さんの在学時代も大盛り上がりだったそうだ。

時代はダンスミュージック真っ盛りの1997年、実行委員を務めていた3年次の岡安さんは、なんとDJ機材をレンタル。後夜祭専用にDJブースを設置して、ダンス、ラップと大騒ぎ。「当日、スモークを焚こうと思って、機材持ち込んで重層体育館で使ってみたけど、全然うまくいかなくて。代わりに花火の煙玉を投げてみたら火災報知器が作動しちゃって。ジリリリリリ・・・！！あれは困った」その後、先生にこっぴどと怒られたそうだ。



終始和やかな雰囲気、小ネタを交えながら語ってくれた

「テレビでも話してるから、ここだけの話でもないですけどね」と懐かしむ。

岡安さんにとって、後夜祭を運営した経験は、その後の人生にも大きな影響を残したそうだ。「まさに単独ライブそのもので。イベントに来てもらうためにチラシ配って、会場準備して、進行プランを詰めて。でも、当日のお客を見ながら演出を変えてみたり。今と全く同じですね」と笑顔で語る。

仕掛ける側の人間になれる楽しさ

仕掛ける側の人であり続けた高校生活だったと言う。3年生になると放送委員に所属。当時実施されていた昼休みの校内放送を、「ラジオ」と呼ばれるレベルにまで発展させた。「音楽流して、コメント乗せてたりしていたのだけど、ある日HIPHOPを流したら、交換留学生のギャロン君が声をかけてきてくれて、仲良くなったんです。おもしろいきっかけでした。数年後に某クラブで奇跡の再会

をしたのはここだけの話ですよ」と隠しネタを披露してくれた。

そんな岡安さんがお笑いの道を見出したのは2年生の頃。所属していたサッカー部を休部し、お笑い活動に本格シフト。同級生とトリオを組んで、オーディションを受け、合格。事務所に所属して、小規模ではあるが、プロのお笑いライブでデビューした。

在学中からお笑いライブに出演、でも

そこから、週末になるとお笑い仲間たちと新宿の公園で野外ライブを運営するようになる。「平日は学校行って、夜はアルバイト。週末はお笑いライブ。バイト代を運営費に充てたり、結構ハードな毎日」と振り返る。

実は岡安さん、高校卒業と同時に笑い活動をいったん休止している。「合宿免許に行ってるうちに、気持ちが冷めちゃって」お笑い活動を再開したのは、高校卒業から2年後のことになる。（後半に続く）